143 保栄茂タルチー（八）

（妹の大力・力比べ）

東辺名がありますよ。向こうの人ですがね。そのお家はとてもあれですが、その保栄茂タルチーといって、武士だったらしいです。その人の話も再々聞いておりますが。

東辺名というところはですね、そこのタルーといってですね、保栄茂タルチーはタルーですからね。タルーという名前を付けないらしいですね。その人に名字負けでね。負けるからといってね。タルーと、あれはですね、付けないと言う話はありますよね。

その人の話はですね、保栄茂タルチーは力がタルーは強いですよ、本当は。このビンということはありますよね。ビンですね。東辺名部落のですよ。ありますが、だからここであの人は力の太郎と言うておるんですがね。

その人がですね。とても武士であったちゅうこと。今も探せばあるはずですよね。戦前まであったんですがね。その人の灰皿ですね、煙草盆。それはもう、石でですね。こんな大きな石でさ、あったんですがね。その人の煙草盆です。その人の話ですね。よく聞いてますがね。

首里から、首里の武士がさ、その、こんな田舎に保栄茂タルチー、力のタルー強いっていってね、とても、だいぶん強いということを首里の武士が聞いてさ。そして、その首里の武士が言うにはね、

「そんな田舎に何と武士といってもね、田舎にはそんな武士がいても、自分ら首里の侍も武士だから、自分にはどうしても叶わん」ちゅうことを言って、やっぱしこっちに勝負さ、勝負を申し込んで、しに来たらしいですね。したらですね、その保栄茂タルチーは、家にはいなくってさ、いなくって、

「ここが力タルチーのお家ですか」と首里の侍が言ったらですね、

「そうです」と言ってですね、そのタルチーの妹が、

「煙草を吸って下さい」と言ってですね、この煙草盆さ、石で、大きな石ですよ。石臼みたいなんですよ。これを持って行って、

「どうぞ、煙草を吸って下さい」と、もう出したらですね、それ、首里の侍はね、武士は、もう大変。この娘でさえね、こんなの、あれはもう四人がかりで担ぐもんだから、こんな大きな石の煙草盆をね、煙草吸って下さいと持ってくるんだからね、そのタルチーといったら、娘でこんな武士だからね、もうとってもこの人には叶わんと思ってですね、この人はですね、首里の武士は、わざわざ首里から来てですね。

その首里の武士は、やっぱしあの、自分の飼犬ですね、犬はですね、連れて行った犬はとっても強い犬だったらしいですね。それも教えてね、この武士より、この犬は二倍ぐらいの力があったって、この犬は。したらですね、その、首里の武士は、タルチーの妹がね、

「どっからいらっしゃったんですか」ちゅうたらですね、

「首里のもんだが、首里から来た」ちゅうこと言うたらしいですね。そしたら、

「あんた、何だ」って言ったら、

「タルチーのうちは妹です」と言ったらね、

「兄さんはどこへ行った」

「よそへ行ってますが、すぐに帰って来ますから」と言うたんですね。もうこれは首里の武士は、もうこんな娘さえそんな武士であるからね、もうとっても自分たちは相手になる人じゃないということでですね、逃げたらしいです、

「失礼します」と言って。

逃げたらですね、ここに、その東辺名からですね、この上里というところから来て、その上里のほうから下りるところに竹藪があるんです。竹ね。唐竹といってですね。今はもう小さいですがね。あの当時はとっても竹がですね、唐竹とコサン竹とあったらしいです。今でも竹は残っておりますがね。このタルチーが来てですね、娘のほうにね、

「今首里からね、首里の侍といってね、来ていたんですがね。今こっちから出て行かれたやつだ」

「で、どこに行きよったか」と。

「今は上里のほうに回って行きよった」って。

「そうか」と言ってですね、これを追ってみようと言ってですね、タルチーは追って行ったら、その、タルチーが行くまでにはもう、この首里の武士は、ニダビラと

いう坂から下りてですね、ここにアシ川堂（小地名）ってありますよ。水もたくさんあるんですよ。ここまでも侍は逃げて行く時に、
「待って下さい」と言ってですね、タルチーは呼んだらしいです。待たしてね。したら、タルチーは竹を、唐竹ね、この竹を抜いてですね、これをこうしてしたらですね、こんな大きな竹ですね。これ、手ですぐ折ったら帯に締めてですね、帯に。
「待て」って。待たしたらしいですよ。
「あんたですか。うちのところへ来たちゅう人は」
「首里のもんです」
「何しに来た」
「あんたと試合に来たけどね、あんたの妹さんがね、煙草盆を持って来たのを私が見て、がっかりして、とってもうちは叶わんということでですね。今逃げてきた」
ということを言うたらしいです。
「そうか、じゃ絶対やらないか」と言うたらしいね。
「とても、あんたには叶わないから」ということを、その首里の武士は言うたらしいですよ。そしたら、
「せっかく首里からね、こっちと相手に来てね。一つやってみてごらん。やろうじゃないか」と言うたらですね、その首里の侍はですね、
「うちの愛犬は二倍の力がありますからね、うちはもうとってもあんたには叶いませんがね、うちの愛犬とやって下さい」と言うたらしいです。
「ああ、そうか。じゃ、やってみるよ。じゃ、その愛犬は、うちが勝ったら、うちが真っ二つにしていいんでしょう」
「いいんです」。
　やったらですね、そのタルチーがですね、犬もやっぱり、教えてあるんだからね。首里の侍の何だから。タルチーもあれしてやっていったらしいですよね。その犬がですね、跳んで来るんでしょう。タルチーがですね、こっち捕まえて、二つに裂いて捨ててですね。
もう、首里の侍も泣いてですね、
「こんな武士もこっちに、タルチーといってね、いたちゅうことをわからなくて、どうもすみませんでした」ちゅて。

字米須　仲宗根善道

類話

字新垣　宮里栄吉
字名城　新垣武登
字小波蔵　伊敷フヂ子
字東里　玉城　春、玉城佐一郎（東辺名区）
　　上良武定、上良徳栄（上里区）
字伊原　玉城ハル